

アンチ〈シンデレラ〉として「歩む」エリザベス・ベネット

『高慢と偏見』におけるジェイン・オースティンの自由な女主人公

杉野久和

「シンデレラ」と Jane Austen の小説

「シンデレラ」と Jane Austen の小説との関係性は、*Mansfield Park* (1814)に限ってよく議論されるが、「シンデレラ」と *Pride and Prejudice* (1813)との関連については、物語構造の大まかな比較検討に留まり、共通点及び相違点の解明はいまだに不十分である。本発表では、Austen 小説で重視される「足元」の描写に焦点を当て、シンデレラとの関係性を探り、その意義を考察した。

「シンデレラ」と *Pride and Prejudice* のヒロイン

Pride and Prejudice において、シンデレラを最も強く彷彿とさせる人物は Jane Bennet である。Mrs. Bennet、Mr. Darcy、Elizabeth、そして Charles Bingley が Jane の美しさを称賛しており、彼女の美貌はシンデレラを想起させる。そんな Jane は、作中で二度開催される「舞踏会」で、裕福な男性 Charles Bingley と出会い、二度目の舞踏会の後にしばらく離れ離れになり、その後、彼から求婚を受けて結婚に至る。この展開は Perrault 版「シンデレラ」のヒロインの物語と一致する。さらに、Jane と Mr. Bingley の会話の描出方法も Perrault 版「シンデレラ」と共通する。シンデレラと王子の会話が“they were talking”と叙述されるものの、具体的な発言内容は一度も提示されない。そして、Jane と Mr. Bingley の会話も「小説のなかでは一度も直接描かれてい」ない（廣野）。長編小説において主要な男女の会話が全く提示されないという稀有な仕掛けは、「シンデレラ」との類似性を補強する。

「シンデレラ」のキャラクターたちと *Mansfield Park* の登場人物の類似性が指摘されているように、*Pride and Prejudice* の登場人物との類似性にも目を向けるべきである。先述のシンデレラと Jane、王子と Mr. Bingley に加えて、ヒロインに敵対する継母の二人娘と Bingley 姉妹、そしてヒロインに豪華な衣服の着用を命じるフェアリー・ゴッドマザーと Lady Catherine de Bourgh には類似点を認められる。

「シンデレラ」との比較で Elizabeth を考察すると、相違点が際立つ。たしかに、彼女も二度の舞踏会で会った裕福な Mr. Darcy から求婚されて最終的に結婚するという点で、シンデレラやジェインと物語の大枠は共通している。だが、その過程において、エリザベスは舞踏会で彼に容姿を貶されるだけでなく、彼からの求婚も拒絶し、シンデレラとは対照的な道を歩む。この対照性を際立たせる要素として、「足元」の描写に注目する。

シンデレラと Elizabeth の対照性

シンデレラと Elizabeth の対照性は、足元の動きに顕著に表れている。シンデレラは“coach”に乗って「舞踏会場」に到着し、時刻を知らせる“chime”を聞くと急いで「徒歩」で帰宅する。二度目の「舞踏会場」からの帰宅では、“glass slipper”が脱げ落ち、そのまま歩いて帰るために、彼女の足が汚れていたことは容易に想像できる。この脱げ落ちた靴が手がかりとなり、足が靴に「フィットする」(“fit”)シンデレラは結婚に至る。シンデレラが馬車に乗って綺麗な足で「舞踏会場」へと向かい泥足で帰宅するヒロインであるのに対して、Elizabeth は泥足で「舞踏会場」と紐づけられる空間へと向かい馬車に乗って帰宅する。

一か所目の「舞踏会場」と紐づく場所は Mr. Bingley 宅の“drawing-room”である。Mr. Bingley はここで Elizabeth に「舞踏会」の話をして、この会話を聞いた彼の妹 Caroline は「舞踏会」に対する関心を顕わにする。ここから続く Caroline の言動によって、「舞踏会」という言葉が、単なる話題に留まらない、示唆に富む意味を持ち始める。

“Much more rational, my dear Caroline, I [Mr. Bingley] say, but it would not be near so much like a ball.”

Miss Bingley made no answer, and soon afterwards got up and walked about the room. Her figure was elegant, and she walked well;---but Darcy, at whom it was all aimed, was still inflexibly studious. In the desperation of her feelings she resolved on one effort more; and, turning to Elizabeth, said,

“Miss Eliza Bennet, let me persuade you to follow my example, and take a turn about the room. . . .” (54-55)

「舞踏会」の話題に続けて、Caroline が室内で高雅に足を動かす様子は、屋内で優雅にステップを踏む「舞踏会」での動きと無縁でないだろう。さらに、Caroline の「歩」みには Mr. Darcy を「狙」うという思惑が伴っており、これも舞踏会における心理的な駆け引きと一致する。また、彼女が室内で Elizabeth とともに「足」を動かすとい

う不可解な行動も、パートナーと一緒に踊る「舞踏会」の慣習を想起させる。Austen は、「舞踏会」という言葉を示した後、Caroline があたかも舞踏会場で踊るかのように部屋の中を歩き回る様子を描出し、Mr. Bingley 宅を疑似的な舞踏会場として演出する。

「舞踏会場」が連想される Mr. Bingley 宅を往復する Elizabeth の移動手段は、シンデレラが「舞踏会場」を往復する方法と正反対である。Elizabeth は「徒歩」で Mr. Bingley 宅に向かう。この際、Jane が体調を崩す原因ともなった前日の雨で道はぬかるみ、Elizabeth の足元は泥だらけになる。Elizabeth の足を見た Miss Bingley は“her ankles in dirt”と気づいている。舞踏会場に入ったシンデレラが賞賛を浴びるのに対し、Elizabeth が Mr. Bingley 宅で感じるのは“contempt” (33)である。また、シンデレラが時刻を知らせる“chime”の音を聞いて即座に退出する一方で、Jane の体調が回復していない段階で“the clock struck three”と時計の音がしても、Elizabeth は帰宅せず滞在し続ける。時刻を知らせる音を聞いた直後の、足の動きの有無は対照的である。そして、帰宅したい Elizabeth は“carriage”の手配を必死に頼み、最終的には“carriage”に乗って帰宅する。Austen は悪天候や Jane の体調不良というリアリズム的な因果を物語に取り入れ、シンデレラとは真逆の移動方法で往復するヒロインの造形に成功した。なお、この移動手段は、もう一度「舞踏会場」と紐づけられる Lady Catherine de Bourgh の邸宅の前後でも確認できる。

移動手段の反転と、それに伴う「足」の“fit”の描写もシンデレラと対照的である。Perrault 版「シンデレラ」では、二度目の舞踏会を終えた後で“glass slipper”が「フィットする」(fit) 女性の足に関心が集まり、王子はその足をもつ女性を探し求める。靴を見たシンデレラは“‘She [Cinderella] laughed, and said: ‘I’d like to try and see if it [the glass slipper] might not fit me!’”と反応して、自分の足が靴に「フィットする」ことを確信する。この“fit”が物語の転換点となり、ヒロインは結婚に至る。一方、*Pride and Prejudice* においては、「舞踏会場」と結びつく Mr. Bingley 宅に Elizabeth が出発する直前、Elizabeth と Mrs. Bennet の会話で“fit”という語が用いられる。

“How can you be so silly,” cried her mother, “as to think of such a thing, in all this dirt! You will not be fit to be seen when you get there.”

“I shall be very fit to see Jane—which is all I want.” (32)

母親が用いた“fit”及び“see”という単語を Elizabeth も使用して返答することで、Elizabeth の「頭の回転の速さ」(“quickness” 7) が際立ち、そして両者の価値観の違いも如実に表れる。母が言う“not be fit to be seen”において、動詞“see”は受動態であり、見る主体として Mr. Bingley などの男性が想定され、女性は「適切に見られる」べき客体と位置づけられる。一方で、Elizabeth の“fit to see Jane”における動詞“see”は能動態で、自らが見る主体となる姿勢を示している。Elizabeth にとって優先されるのは、男性から適切と「見られる」(“to be seen”) ことよりも、体調を崩している“a most beloved sister” (186)である「Jane に会う」(“to see Jane”) ことである。“fit”をめぐる母娘の対立を通じて、能動的かつ自立的な行動を選択する Elizabeth の価値観が際立っている。

自由な男女の「歩み」

Pride and Prejudice は、「足元」に囚われない自由な男女が二度の舞踏会を経て結婚に至る物語とまとめられる。Elizabeth と Mr. Darcy、そして Jane と Mr. Bingley は足元への意識が希薄なカップルである。そもそも Austen は分け隔てなく男女の足を象徴的に描きだす作家である。前作 *Sense and Sensibility* の Edward Ferrars の描写で「拘束」や「足かせ」を意味する“fetter(ed)”という語が繰り返し用いられて彼の不自由な状況が示されていることを考慮すれば、Austen にとって、「足」の自由さは、単なる身体的な描写に留まらず、そして男女問わず、内面の自由さを示す意味があるはずだ。*Pride and Prejudice* の結末において、主人公の足元に制限は見られない。“They [Elizabeth and Mr. Darcy] walked on, without knowing in what direction” (346)と記されており、二人の行く末には、悩ましいほど無限の可能性が広がっている。Collins 邸には数多くの「柵」(“The paling”, “the green pales and the laurel hedge”, “the small gate” 153-54) が存在する一方で、Darcy の邸宅がある Pemberley の描写には「柵」が一本も描かれていない。境界に囚われることのない Elizabeth の自由な活発さが本作の核心であり、愛する家族を思って「歩み」続ける主人公の姿にこそ *Pride and Prejudice* の魅力がある。

引用文献

Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Penguin, 2014.

Perrault, Charles. *Little Red Riding Hood, Cinderella, and Other Classic Fairy Tales of Charles Perrault*. Edited by Angela Carter. Penguin Publishing Group, 2008.

廣野由美子. 『100 分 de 名著 高慢と偏見』NHK 出版、2017 年。